〈　小学校　道徳部会　〉

研究主題　　道徳の時間の特質を生かし、指導効果を高める指導過程の研究開発

研究の概要

平成 10 年に試行された道徳授業地区公開講座は、平成 14 年度から都内公立小・中学校全校実施となった。これに伴い、小学校の道徳の時間の平均授業時数は、平成 10 年度の 32.2 時間から平成 15 年度の 35.5 時間に増加した。各学校では、道徳の時間の指導の工夫を行い、特質を生かした授業が展開されているが、道徳の時間が目指すねらいや特質から逸脱した授業も少なくない。

そこで、学習指導要領が目指す「生きる力」の育成のために、道徳の時間が果たす役割を再確認し、道徳の時間の特質を生かし、指導効果を高める指導過程を追究した。

とりわけ、学習指導要領の内容と教師の指導観とのかかわりを明確にし、教師の具体的な指導が道徳の時間の特質にどのように反映しているのかを、授業研究を通して明らかにした。

Ⅰ　研究の目的

学校の教育課程は、各教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間によって編成される。これらの教育活動の特質を生かした学習を着実に積み重ねることが、学習指導要領が目指す「生きる力」の育成につながる。「生きる力」を育てるためには、道徳教育の充実も不可欠であることは言うまでもない。しかし、学校の教育活動全体を通して行う道徳教育と道徳の時間の差異を十分に理解しないままに、日々の授業を行っている状況も散見される。道徳の時間の課題としては、「道徳的価値の自覚を深め道徳的実践力を高める効果的な指導の推進」が挙げられている。

そこで、教師一人一人が道徳の時間の特質を再認識し、学習指導要領の内容などその基準性を踏まえ、児童の実態に即した授業構想を確実に行えるようにする必要があると考えた。

そのためには、教師が適切な指導観をもつこと、適切な指導観に基づく明確なねらいを設定すること、ねらいに基づく意図的、計画的な指導を行うこと、児童の実態を踏まえた効果的な指導を行うことなどの諸課題の解決を図ることが不可欠であり、このことが確かな道徳的実践力の育成につながるものである。

本研究は、ややもすると性急に児童の変容を求める授業が散見されがちな中で、道徳の時間の特質を生かした指導の在り方を再確認し、道徳の時間の指導を充実させる提案をすることを目的としている。

Ⅱ　研究の方法

1　道徳の時間の特質を踏まえた指導の在り方

学習指導要領及び解説に基づきながら、道徳の時間の特質、とりわけ「道徳的価値の自覚を深める」指導の在り方を明らかにする。

2　道徳的価値の自覚を深める授業構想の在り方

道徳的価値の自覚を深める授業を効果的に行うために、以下のような手順で授業構想の在り方を追究した。

(1) 教師の適切かつ明確な指導観を、学習指導要領の内容及び児童の実態を勘案しながら明確化する手順を明らかにする。

(2) 適切な指導観に基づくねらいを設定し、資料活用の仕方、発問構成など具体的な授業構想の在り方を明らかにする。

(3) 授業記録を基に、実際の指導が道徳の時間の特質に適ったものか否かを、分析、考察し

授業改善を図る。

Ⅲ　研究の内容

1　学習指導要領の基準性を生かした道徳の時間の指導

■　道徳の時間の目標

道徳の時間においては，道徳教育の目標に基づき，各教科，特別活動及び総合的な学習の時間における道徳教育と密接な関連を図りながら，計画的，発展的な指導によってこれを補充，深化，統合し，道徳的価値の自覚を深め，道徳的実践力を育成するものとする。

(1) 計画的，発展的に指導する

道徳の時間の大きな特徴は，全教育活動で行われる道徳教育との関連を明確にし，児童の発達段階に即しながら，基本的な道徳的価値の全体にわたって計画的，発展的に指導することである。

各学校の道徳の時間の年間指導計画に従って指導する

(2) 学校教育全体で行う道徳教育を補充，深化，統合する

各教科や特別活動、総合的な学習の時間で学んだ道徳的諸価値を全体にわたって人間としての在り方や生き方という視点から捉え直し，自分のものとして発展させていこうとする時間である。

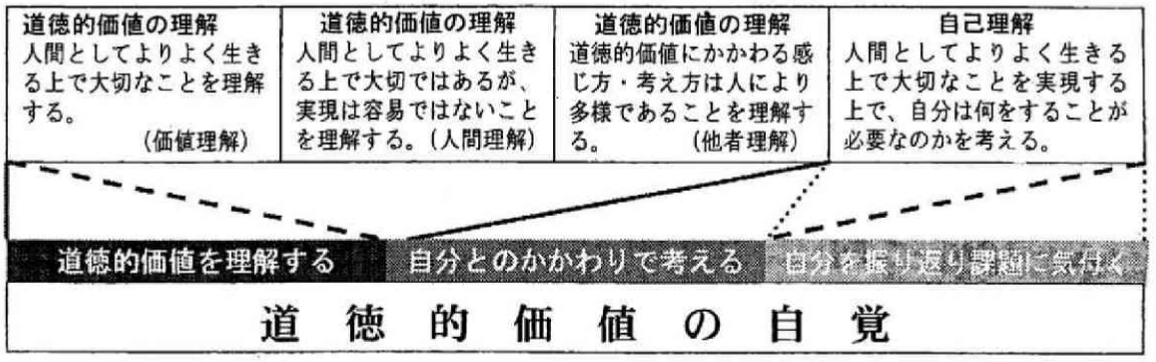
児童がこれまでに学んだ道徳的価値をとらえ直し、発展させる。

(3) 道徳的価値の自覚を深める

① 道徳的価値について理解する。
道徳的価値が人間らしさを表すものであるため、人間理解や他者理解を深めるようにする。

② 自分とのかかわりで道徳的価値がとらえられる。
道徳的価値を自分とのかかわりでとらえ、考える。

③ 道徳的価値にかかわる課題を培い人間としての生き方についての自覚を深める。
道徳的価値を視点として現在の自分を自覚し、道徳的価値にかかわる課題に気付く。



(4) 道徳的実践力を育成する

■　道徳的実践力とは

① 一人一人の児童・生徒が**道徳的価値を自分の内面から自覚し**，将来出会うであろう様々な場面，状況においても，道徳的価値を実現するための適切な行為を主体的に選択し，実践することができるような内面的資質。

② 道徳的実践の基盤となるもの。

③ **徐々に，しかも，着実に養われること**で潜在的に，持続的な作用を行為や人格に及ぼすもの。

道徳の時間の特質を生かした指導とは

●道徳的価値の自覚を確実に図ること　●児童の行為の変容を直接的に求めないこと

2　道徳的価値の自覚を深める授業構想の在り方

(1) 適切な指導観をもって授業を構想する

道徳の時間の指導案において、教師の指導観を表す箇所は、「主題設定の理由」として示されることが多い。「主題設定の理由」には、指導者の価値観を示した「ねらいとする道徳的価値」、児童観を示した「児童の実態について」、資料観を示した「資料について」が盛り込まれている。

これらに整合性をもたせてねらいを設定し、具体的な授業を構想することが重要である。適切な指導観をもつためには次のような留意事項が挙げられる。

■　**価値観**　（ねらいとする道徳的価値について）

(1) ねらいとする道徳的価値が学習指導要領を根拠として示されているか。
（それぞれの内容については、解説に具体的に示されている。）

(2) 教師の主観的、独善的な記述になっていないか。

(3) 他の道徳的価値と混同した記述になっていないか。

■　**児童観**　（児童の実態について）

(1) ねらいとする道徳的価値にかかわる児童の状況が示されているか。
（一般的な行動の様子を記述するのではないことをおさえる。）

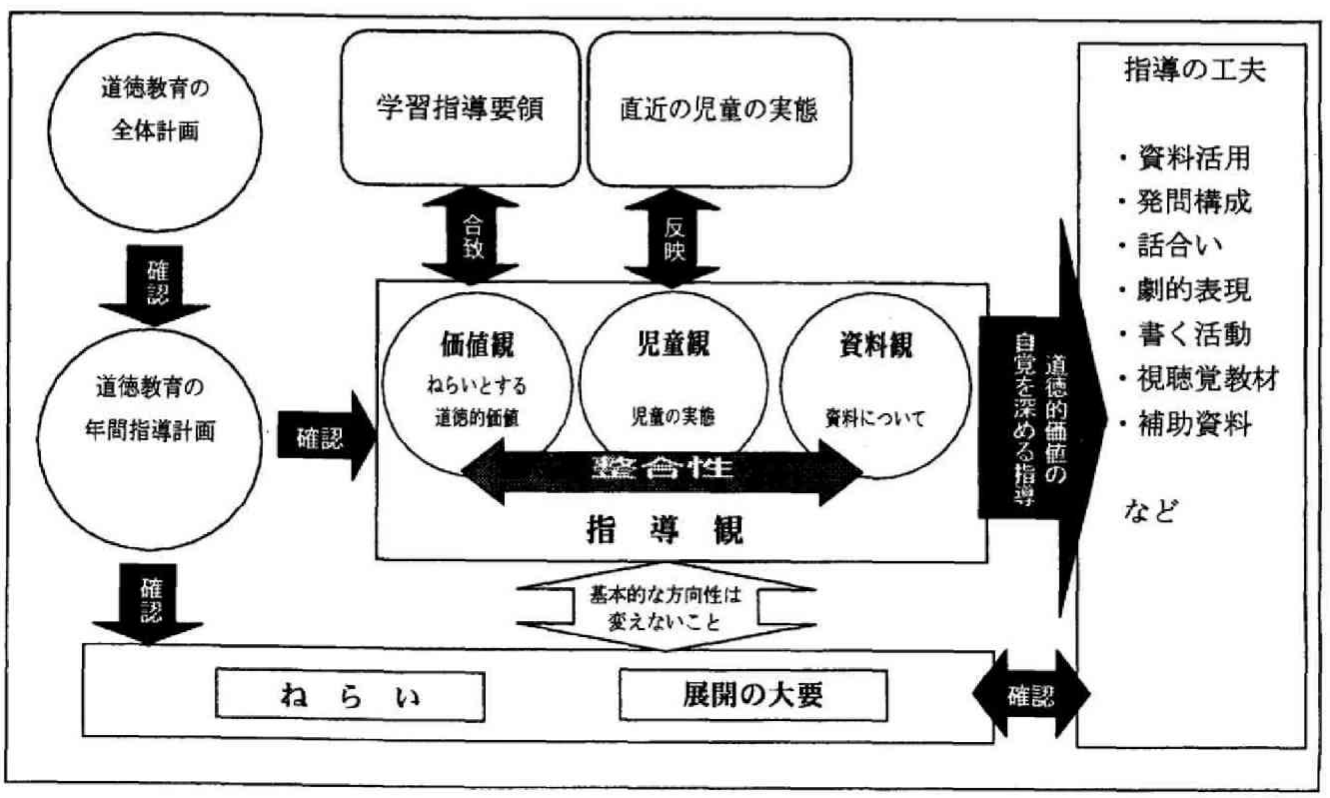
(2) 児童の問題傾向の列挙に終始していないか。
（ねらいとする道徳的価値にかかわるプラス面、マイナス面を調和的に示すようにする。）

■　**資料観**　（資料について）

(1) 指導する上での具体的な資料の活用の仕方が示されているか。
（資料の粗筋やストーリーのみの記述ではないことが重要である。）

(2) 考えさせたい場面が明確になっているか。
（資料の山場と、授業で中心に取り上げる場面は必ずしも一致しない。）

(2) 適切な指導観に基づく授業構想



Ⅳ　指導事例

1　第１学年　親切の指導

主題名	やさしい気持ちで	内容項目	２－（２）
資料名	はしの　うえの　おおかみ	出　典	文部省　道徳の指導資料

(1) 主題設定の理由

①　ねらいとする道徳的価値について（**価値観**）

人に親切にすることは、相手の立場や気持ちを考え思いやりいたわる温かい心である。人と人との温かいつながりを作り、お互いが思いやる関係を築き上げることは、人間として生きていく上でとても大切なことである。

人は元来優しさや親切な心をもっているが、目先の欲や楽しさが優先してしまうことで打ち消されてしまうことがある。だからこそ、優しさや親切な心をもっていることを自覚させなければならない。自分のもっている優しさや親切心が、相手に伝わり喜びとなって自分に返ってきたときの満足感を理解させ、**相手の気持ちを思いやりながら、優しく接しようとする心情を育てていきたい。**

②　児童の実態について（**児童観**）

思いやりや親切についての行為の大切さは頭ではよく分かっているが、自己中心的な行為をとる児童が多くいる。しかし、その中でも、けがをしたり泣いいたりしている子を見ると「どうしたの」と声をかけたり、保健室に連れて行ったりしてあげられる児童もいる。

１年生の児童は、学校生活の中で、６年生をはじめとする上級生に親切にしてもらったり、遊んでもらったりすることが多い。本時の指導を通して優しくされることも優しくすることも気持ちがよいことに気付き、**相手の気持ちを思いやりながら、優しく接しようとする心情を育てていきたい。**

③　資料について（**資料観**）

一本橋の上で主人公のおおかみが、次々に渡ってくる自分より弱い動物たちにいじわるをして喜んでいる。ある日おおかみは一本橋の上で自分より力の強そうなくまに出会った。おおかみはそのくまに思いもかけず優しく橋を渡してもらったことをきっかけに、それまでの自分の行動を改めいろいろな動物たちに優しく橋を渡してあげるようになった、という内容である。

本資料でいじわるをしているとき、くまに出会ったときのおおかみの心情を考えながら、思いがけずくまに親切にしてもらったときのおおかみの気持ちを考えさせたい。そのために、具体的な場面設定や状況を理解させ、おおかみの立場で考えさせるために、動作化を用い疑似体験を活用する。さらにおおかみが小動物たちに**親切にしたときの心情を考えさせ、親切にすることの喜びへとつなげていきたい。**

価値観・児童観・資料観の整合性が保たれ、ねらいにつながっている。

(2) ねらい

相手の気持ちを思いやりながら、だれに対しても温かい心で接し親切にしようとする心情を育てる。

※　１年生の児童に、相手の気持ちを思いやりながら、優しく接しようとする心情を育てたいという指導者の思いが確かな指導観となっている。教師の価値観は、学習指導要領の低学年の２－(2)の内容に合致している

(3) 展開の大要

	指導の意図（■）主な発問（○）予想される反応（・）	指導上の留意点（・）
導入	■　親切にしてもらった体験について振り返る。 ○人から親切にしてもらった体験を発表し合う。 ・６年生が遊んでくれた。 ・けがをしたときに、保健室に連れて行ってくれた。	・アンケートの結果より、身近な生活経験を想起させる。 ・親切にしてもらった時の気持ちにもふれる。
展開 多様な感じ方・考え方	■　資料「はしのうえのおおかみ」を読み話し合う。 ○「もどれ、もどれ」と言って、動物たちを追い返したときのおおかみは、どんな気持ちだったか。 ・いじわるってなんて楽しいんだろう。 ・おれは強いんだぞ。 ・やあい弱虫。（動物に向かって） ○くまに出会って「わたしがもどります」と言ったとき、おおかみはどんなことを思ったか。 ・ぼくよりも強そうだ。 ・いじわるをされたらいやだ。 ・怖いなあ。 ・道をゆずろう。 ◎「ほら、こうすればいいんだよ。」と抱き上げられ後ろへ渡されたおおかみは、どんなことを思ったか。 ・くまさんは優しいな。 ・親切にされてうれしいな。 ・ぼくもくまさんみたいにすればよかった。 ・もういじわるはやめよう。 ○おおかみはどんな思いから、動物たちを優しく渡すようになったのか。 ・くまさんに親切にしてもらってうれしかった。 ・みんなに喜んでもらいたい。	・おおかみと自分自身を重ね合わせることができるように、紙芝居を活用して資料提示をする。 自分とのかかわりで考えさせるための手だて **【道徳的価値の自覚を深める】** ・ついいじわるをしてしまいがちな気持ちをおおかみの立場で考えさせる。 自分とのかかわりで考えさせるための発問 **【道徳的価値の自覚を深める】** ・くまが自分より力があって、強そうであることを押さえる。 ・おおかみの心の中を考えさせる。 ・動作化を用い、自分より強そうなくまに親切にされたときのおおかみの気持ちをもとに、親切にされたときの多様な感じ方・考え方に出会わせる。 親切にかかわる多様な感じ方・考え方に出会わせるための発問と指導の手だて **【道徳的価値の自覚を深める】** ・親切にすること、されることの喜びを味わわせる。
	■　自分自身を振り返る。 ○人に親切にしてよかったと思ったことはありますか。そのとき、どんな気持ちがしたか。 ・友達が落とした、色鉛筆を一緒に拾ってあげて、ありがとうと言われたときはうれしかった。 ・係の仕事を手伝ってあげて、友達が喜んでくれたのでやってよかったと思った。	・アンケートなどを手がかりにしてふりかえらせる。 児童自身が親切にかかわる体験を振り返り、課題に気付かせる発問と話合い。 **【道徳的価値の自覚を深める】**
終末	■　教師の話を聞く。 ・「心のノート」を読む。	・余韻に浸りながら、授業を閉じる。

(4) 評価の観点

○　優しくされたときの多様な感じ方・考え方に気付くことができたか。
○　おおかみの思いを自分の体験を基に想像することができたか。

道徳的価値の自覚を深めることを視点とした評価

2　第４学年「生命尊重」の指導

主題名	尊い生命	内容項目	３―（２）
資料名	お母さん　なかないで	出　典	文部省道徳の指導資料とその利用

(1) 主題設定の理由

①　ねらいとする道徳的価値（**価値観**）

生命はかけがえのないものである。一度失われた生命が再びよみがえることはない。生命の尊さを理解し、尊重することは人間にとって重要なことである。しかし、普段の生活の中では生きていることを当然のようにとらえ、生命の尊さについて意識して生活していることは少ないように感じる。また、生命を軽視した痛ましい事件があまりにも多い今日、いとも簡単に生命が失われている社会的風潮がある。そのため、生命のかけがえのなさについて実感をもちにくい状況にある。

そこで、「生」の対極にある「死」を考えることで、生命は本人のみならず、それを取り巻く人々にとってもかけがえのないものであることを実感させたい。そして、一度限りの人生をだれもが精一杯生きているということを自覚させ、**今ある生命を大切にして生きていくこと、他の人の生命も同様に大切にしていこうとする心情を育てたい**と考えた。

②　児童の実態（**児童観**）

児童は生命が大切であることを観念的には理解している。しかし、ゲーム等でリセットされる生命に慣れてしまい、生や死について深く考えないまま育ってきている。身近な人の誕生や死に出会った経験も多くないため、喜びや悲しみ、喪失感などを自分の体験としては味わっていない。人が「死ぬ」ことの意味、それを実感として受け止められないのである。そのためか、友達同士のささいなトラブルの際、生命を軽んじるような言葉を平気で口にしてしまう児童もいる。

努力してよい結果を得たり、欲しいものを買ってもらえたりしたときには生きる喜びを感じるという児童も多い。本時の指導を通して、**今ある生命を大切にして生きていくこと、他の人の生命も同様に大切にしていこうとする心情を育てたい。**

③　資料について（**資料観**）

幼稚園のときから仲良しだった親友の正子は、１年前、主人公の誕生会に来る途中にダンプカーにはねられ、手術のかいもなく、「お母さん、泣かないで。」の言葉を最後に亡くなってしまう。通夜の席で、主人公が正子の母から手渡されたのが、誕生日のプレゼントになるはずだったぬいぐるみと手紙であった。翌日の葬式でも涙があふれてならなかった。その後の生活では、前よりも自分や家族への安全に気づかうようになった。

親友を失った主人公や我が子を失った両親の気持ちを考えさせることで、死の衝撃や悲しみ、喪失感とともに、生命は一度失われると二度と元にはもどらないものであり、そのかけがえのなさについて気づかせたい。そして、**生きていることの喜びとともに自他の生命を大切にしていかなければならないことについて深く考えさせたい。**

価値観・児童観・資料観の整合性が保たれ、ねらいにつながっている。

(2) ねらい

生きていることの喜び、自他の生命を尊重しようとする態度を育てる。

※　生命が失われることの意味を考えさせることを通して、今ある生命を大切に生きていこうとする心情、自他の生命を尊重しようとする態度を育てようとする指導者の意図がある。

(3) 展開の大要

	指導の意図（■）主な発問（○）予想される反応（・）	指導上の留意点（・）
導入	■生命という言葉から思い付くことを発表させる。 ○生命という言葉から思い付くことはどんなことか。 ・なくてはならないもの　・とても大切なもの	・「生命」のとらえ方について話し合うことで、ねらいとする道徳的価値への方向付けをする。
展開 多様な感じ方・考え方	■ 資料「お母さんなかないで」を読み、自分の思いと重ね合わせて生命について考えさせる。 ○正子の事故の話を聞いたわたしは、どんな気持ちだったか。 ・うそだ、信じられない。 ・夢であってほしい。 ・大好きなまあちゃんが死ぬなんて嫌だ。 ・まあちゃんは、あんなに車に注意していたのに。 ○お通夜で正子からのプレゼントと手紙を手渡されたわたしは、どんなことを思ったか。 ・まあちゃん、帰ってきてよ。 ・どうして事故になんか遭ったの。 ・もう仲よくなんかできない。 ・わたしのためにもんちゃんをくれて、ありがとう。 ◎お葬式で思わず大きな声で「まあちゃん」と叫んだとき、わたしはどんな気持ちだったか。 ・まあちゃんに会えなくて悲しいよ。 ・まあちゃんといっぱいお話がしたいよ。 ・いつまでもわたしたちは一緒よ。 ・まあちゃん、これからもずっと友達でいようね。 ・まあちゃん、こんなに大勢の人が悲しんでいるよ。 ・まあちゃんの分までがんばって生きていくよ。	死に直面したときの気持ちを考えさせるための手だて **【道徳的価値の自覚を深める】** ・親友の突然の事故を知ったときのわたしの気持ちを、自分自身を重ね合わせて考えさせるようにする。 ・お通夜で手紙を読んだときのわたしの気持ちを想像させる。 自分とのかかわりで考えさせるための発問 **【道徳的価値の自覚を深める】** ・遺影に向かって思わず叫んだわたしの気持ちから、生命にかかわる多様な感じ方、考え方を引き出し、話し合わせる。 生命尊重にかかわる多様な感じ方・考え方に出会わせるための発問と指導の手だて **【道徳的価値の自覚を深める】**
	■ 「生命の大切さ」にかかわる体験を想起し、自分自身を振り返らせる。 ○命って大切だなと感じたのはどんなときか。そのとき、どんなことを思ったか。 ・テレビで地震で大勢の人がなくなったニュースを見た。命は大切にしなければいけないと思った。 ・おじいさんがなくなったとき命は大切だなと思った。	・書く活動を通して、自分の体験やそのときの思いを振り返らせる。 書くことによる振り返りの深化と体験の交流を通した話合い。 **【道徳的価値の自覚を深める】**
終末	■ 教師の話を聞く。	・教師の小学校時代の体験談を話す。

(4) 評価の観点

○ 生命にかかわる多様な感じ方・考え方に気付くことができたか。
○ 書く活動を通して自分の体験を振り返ることができたか。

道徳的価値の自覚を深めることを視点とした評価

3　第６学年「不とう不屈」の指導

主題名	やり遂げた喜び	内容項目	１―（２）
資料名	第九交響曲初演	出　典	文部省道徳の指導資料とその利用

(1) 主題設定の理由

① ねらいとする道徳的価値（**価値観**）

現代社会は、「飽食の時代」と言われ、「苦労をせずに、いかに楽をして生きるか」という考え方が強くなっている。また、目標に向かってねばり強く努力するような生き方は、否定されがちな風潮もあるが、いつの時代も目標に向かってねばり強く努力した者こそが自分の道を切り開いてきた。

様々な困難に直面しても、夢や希望を捨てずに、勇気をもって努力していった先人の生き方を通して、**自分も理想に向かってくじけずに努力していこうとする心情を育てたい。**そして、自分が決めた目標やり遂げたときの達成感や成就感を味わうことができるような生き方を考えさせていきたい。

② 児童の実態（**児童観**）

高学年の時期は、自分の将来に対し、自分なりの夢をもち、それに向かって努力しようとする気持ちをもつことが大切である。しかし、現実には夢をもっても、様々な困難にくじけてしまうことも多い。児童の中には、夢や目標をもっても、小さな失敗でも萎縮してしまい、自信と意欲を失う者が少なくない。

また、初めて直面することに対して、努力せずに「無理だから。」や「どうせ出来ないから。」という気持ちでやり過ごす児童もいる。自分の将来に対し、**自分なりの夢をもち、それに向かって努力していこうとする心情を育てる**ために、自分が決めた目標に対し、ねばり強く努力して達成したときの喜びをひとつひとつ積み上げていくことができるような生き方を考えさせていきたい。

③ 資料について（**資料観**）

「楽聖」と呼ばれているベートーベンは、歴史に名を残す大音楽家である。その生涯は、苦悩に満ちていた。家の面倒を見なければならなかった家庭環境や、耳が聞こえなくなるという音楽家にとっては致命的な不運に直面したからである。その困難さから音楽家になるという夢に対して、何度も挫折しそうになったのだが、音楽に対する深い愛情と強い精神力で乗り越えていくのである。

本資料には、そのベートーベンが死力を尽くして完成させた「第九交響曲」の初演の様子が描かれている。演奏が終わり、聴衆の喝采を浴びたベートーベンが涙を流した姿に、自分の夢をあきらめずに追い求め、やり遂げた達成感や成就感が表れている。そのベートーベンの姿や気持ちを考えることにより、**目標に向かって努力し、やり遂げた達成感や成就感を児童自身が味わうことができるような生き方を考えさせ**ていきたい。

価値観・児童観・資料観の整合性が保たれ、ねらいにつながっている。

(2) ねらい

困難にくじけず、目標に向かってねばり強くやり通そうとする心情を育てる。

※　授業者は明確な目標をもつこと、困難を克服すること、やり遂げた喜びを味わうことをねらいとする道徳的価値を支えるものと捉え、その観点で児童の実態を把握し、資料分析を行っている。

(3) 展開の大要

	指導の意図（■）主な発問（○）予想される反応（・）	指導上の留意点（・）
導入	■ベートーベンの略歴を聞かせ、ベートーベンの生き方に自分の思いを重ね合わせやすくさせる。 ○ベートーベンについて知っていることはあるか。 ・有名な作曲家　・耳が聞こえなかった人	・ベートーベンの生涯に触れる。 ・ベートーベンの人物画やドイツのボンとオーストリアのウィーンの位置を明示した世界地図を提示する。
展開	■　ベートーベンに自分の思いを重ね合わせて「くじけないで努力すること」について考えさせる。 ○生活が苦しく、家の面倒をみなければならなかったが、音楽家への夢を捨てなかったのは、ベートーベンの思いはどんなか。 ・有名になって楽な生活をしたい。 ・自分が選んだ道だから、夢をかなえたい。 ○耳が聞こえなくなってしまったときのベートーベンはどんな気持ちだったか。 ・なぜ自分がこんなことにならないといけないのか。 ・とても苦しい、もうだめだ。 ・生きていく希望がなくなった。 ◎ベートーベンは大音楽家になるが、耳が聞こえなくなってからどんな思いで作曲を続けたのだろうか。 ・耳が聞こえないのでよい曲を作れない。 ・夢が遠のいていくようでやりきれない。 ・いつかまた聞こえるようになるかもしれない。 ・自分にできることを精一杯やってみよう。 ・苦しみに負けたくない、必ずよい曲をつくる。 ○演奏会が終わって涙を流したベートーベンは、どんな気持ちだったか。 ・感激してくれて嬉しい。 ・自分の思いが伝わってよかった。	登場人物と児童自身を重ね合わせて考えさせるための手だて **【道徳的価値の自覚を深める】** ・資料の内容を理解させるために、補足説明をする。 ・自分の目標をもったベートーベンの心の中を考えさせる。 自分とのかかわりで考えさせるための発問 **【道徳的価値の自覚を深める】** ・困難に出会ったときの思いをベートーベンの立場で考えさせる。 ・夢をかなえる強い意志や、つい、くじけそうになる弱さなどの多様な考え方、感じ方に出会わせるようにする。 不とう不屈にかかわる多様な感じ方・考え方に出会わせるための発問と指導の手だて **【道徳的価値の自覚を深める】** ・やり遂げたときの達成感、成就感を味わわせるようにする。
	■　「不とう不屈」にかかわる自分の体験を思い出し、そのときの気持ちを振り返る。 ○今までの生活で、途中でくじけそうになったが、あきらめずにやり通した経験があるか。また、やり遂げたときはどんな気持ちだったか。 ・鉄棒で技が出来るようになって楽しかった。 ・音楽の合奏で担当した楽器が弾けるようになった。練習を続けてきたので嬉しかった。	より自分自身のことを振り返りやすくするための手だて **【道徳的価値の自覚を深める】** ・ベートーベンほどの努力でなくても、児童一人ひとりが目標に向かって努力した体験があることをおさえる。 ・書く活動を通して、明確に自分自身を振り返らせる。
終末	■　ベートーベン作曲の「第九交響曲（よろこびの歌）」を聴きながら、余韻をもって締めくくる。	・第九交響曲にこめた思いを、その曲調から感じさせる。

多様な感じ方・考え方

4　評価の観点

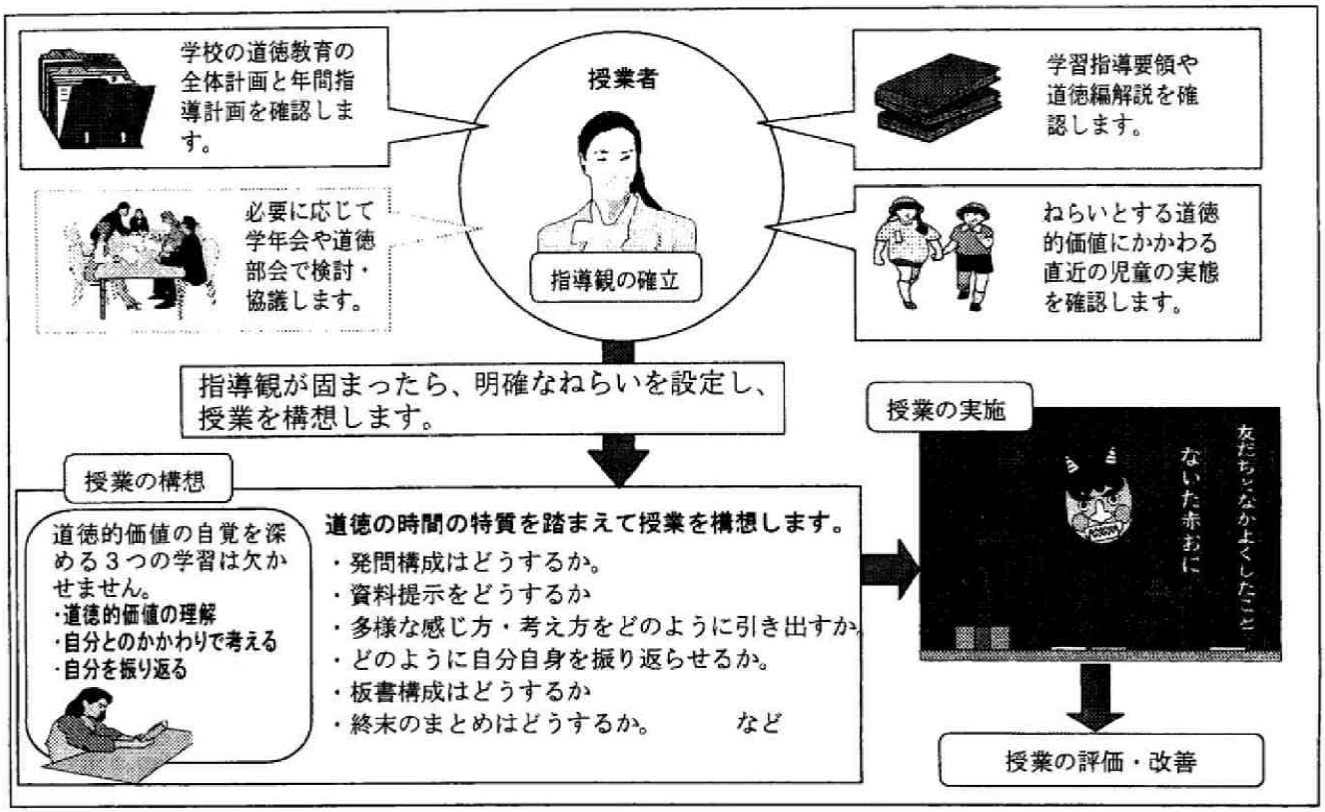
○　ベートーベンの心情を通して、やり遂げることについての多様な感じ方、考え方を知ることができたか。

○　今までの自分の生活を振り返り、目標を達成したときの喜びを想起させることができたか。

道徳的価値の自覚を深めることを視点とした評価

V　道徳の時間の一層の充実に向けて

1　適切な手続による道徳の時間の指導を（道徳の時間の授業を行う手順の確認）



2　道徳の時間の特質を欠かさないために

(1)　道徳的価値の理解を深める学習

道徳的価値の理解は、「ねらいとする道徳的価値が大切であること（価値理解）」、「大切ではあるが道徳的価値に根ざした行為は容易ではないこと（人間理解）」「道徳的価値にかかわる感じ方・考え方は人によって様々であること（他者理解）」である。この３つの学習を盛り込んだ授業を創造することが必要である。

(2)　児童が自分とのかかわりで考える学習

児童の主体的な学習とは、児童がねらいとする道徳的価値にかかわる諸事象などについて、自分とのかかわりを実感しながら学ぶことである。授業構想に当たっては、児童が諸問題を自分事としてとらえ、自分の体験などに基づいて考えられるようにすることが重要である。

(3)　ねらいとする道徳的価値を視点に自分自身を振り返る学習

自分自身を振り返る学習とは、児童一人一人がねらいとする道徳的価値にかかわる行為、考え方、感じ方はどうだったかを、具体的に振り返ることである。授業者は、確固たる指導観に基づき、児童にどのような視点で振り返りをさせるのかを明確にする必要がある。

(4)　性急な児童の変容を求めることのない学習

道徳の時間の特質である「道徳的実践力の育成」がある。道徳的実践力は、徐々に，しかも，着実に養われることで潜在的に，持続的な作用を行為や人格に及ぼすものであることを十分認識し、性急な児童の変容を求めるような指導に陥らないことが不可欠である。

子どもたちにかかる事件が起こるたびに、心の教育の充実が求められている。道徳の時間は、これらの課題に緊急的に対応する特質をもたない。道徳の時間の特質を生かした１時間１時間の授業の積み上げこそが、事件を起こさない人間を育成するものである。各学校では、校長のリーダーシップの下、全教職員がこのことを十分に理解し、日々の授業を大切にしていかなければならない。